

動物を介在させた活動における大動物の健康に関する研究
(The study of health of large animals in the activities using animals)

学位論文の内容の要旨

日本獣医生命科学大学大学院獣医生命科学研究科
獣医保健看護学専攻後期課程平成 28 年入学

銀 梓

(指導教授：小林 真理子)

近年、人の精神的、肉体的および社会的な健康の改善と向上を目的に、ウマやウシなどを介在させた活動が注目されるようになった。しかし、活動時における動物、特に大動物を対象としたストレスおよび福祉に関連した研究や報告はほとんどない。そこで本研究において、第一章では、学生を対象とした牧場での実習を、動物へのストレスの少ない実習にするための一助として、実習前後の乳牛の血清中のコルチゾール（COR）濃度や血液生化学値などの変化を観察した。第二章では、各種の活動で用いられることが多いウマを対象に、血液生化学性状の違いを検討し、品種間の差を明らかにするとともに、一乗馬クラブの会員を対象に、定められた給餌以外の餌やりに関する意識調査を行った。第一章において、乳牛 29 頭の実習前後の血清中の COR 濃度の測定結果に有意な差が認められたことから、不特定多数の学生と接する牧場実習は乳牛のストレスの原因になることが明らかとなった。しかし、実習後の COR 濃度の上昇率は、他のストレス負荷時に比べ特に高いものではなかった。実習中でも乳牛の通常の生活に合わせて、給餌および搾乳を行ったことが原因と考えられた。他方、ストレスには個体差があり、経験を積むことでストレスを軽減出来る個体とストレスに敏感な個体がいることが明らかとなった。第二章では、サラブレッド（サラ）50 頭、ポニー49 頭およびミニチュアホース（ミニ）14 頭の血液生化学検査値を観察した。得られた結果を用いて、主成分分析を行った結果、サラ、ポニーおよびミニに分類された。また、判別率は、サラ、ポニーおよびミニで、それぞれ 96.0、79.59 および 92.86% となり、品種間の差が明らかとなった。上記の結果の一部を用いて、乗馬クラブ会員 43 名にアンケートを行った。結果、中性脂肪値の説明後では、おやつに賛成する意見は有意に減少し、正しい知識を持つことが、おやつへの抑制に繋がり、飼養管理について理解する契機になったと考えられた。ウマを所有している会員（自馬）と一般会員（一般）に分けて比較を行った結果、説明の有無にかかわらず、おやつへの賛成意見は一般に比べて自馬で有意に少なかった。ウマの健康を考えた時、おやつは、自馬の大きな不安要素であることが考えられた。ウマの健康に対し、飼育者の飼養管理に関する知識習得を支援する重要性が明らかとなった。